「ぶどう園の農夫の罪」

ルカ 20:9-19

2020.8.23 南与力町教会朝拝

序：文脈と主題―イエスを殺した人間の罪

イエス様は神殿に入り、そこで商売をしていた人々を追い出し、民衆に教えておられました。イスラエルの指導者たちはイエスに敵意と殺意を抱くようになりました。20 章からはイエスとその敵対者たちとの論争が繰り広げられています。

今日のところで語られた「ぶどう園の農夫のたとえ」も 20 章 19 節で「そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいた」とあるように、イスラエルの指導者たちに向けて語られたものです。しかしこのたとえは指導者たちだけに語られたのではありません。9 節には「イエスは民衆にこのたとえを話し始められた」とあるように、イエス様はこれを民衆にも語られたのです。

このたとえでイエス様が明らかにしているのは神の御子イエス・キリストを殺してしまう人間の決定的な罪です。私たちはイエス・キリストの十字架の死が私たちの救いのためであったと信じています。それは聖書が語っている真理であり、福音です。しかし同時にイエスを十字架につけて殺したのは人間の罪によるものであったこと、そしてその罪は自らの神の裁きと滅びをもたらす決定的な罪であることを私たちは警告として心に留めている必要があります。

①このたとえの意味

9 節には「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た」とあります。「ぶどう園」とは旧約聖書でイスラエルを指すものとして出てきます（イザヤ書 5 書参照）。ぶどう園の主人は神様です。そしてそのぶどう園が任された「農夫たち」とはイスラエルの指導者を表しています。

10 節には「収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った」とあります。この「僕」は旧約時代から遣わされた預言者を表しています。主人はぶどう園の収穫の一部を納めさせるために僕を送ったのです。「ところが、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせないで追い返した」とあります。これは契約違反です。農夫はぶどう園を貸してもらう代わりに、その収穫の一部を主人に納めることを約束していたはずです。それにも関わらず農夫たちは遣わされた僕を殴りつけ、何も持たせないで（空手で）追い返してしまったのです。この時点で主人は農夫たちに怒り、ぶどう園を取り上げてもおかしくはありません。しかし、この主人はそうはせず、ご自分の僕を遣わし続けるのです。20 章 11 節

「そこでまた、ほかの僕を送ったが、農夫たちはこの僕をも袋だたきにし、侮辱して何も持たせないで追い返した。」

しかし主人はまだ諦めず僕を送り続けます。12 節

「更に三人目の僕を送ったが、これにも傷を負わせてほうり出した。」

このように主人は驚くべき忍耐をもってご自分の僕を遣わし続けました。これは旧約時代、神がご自分の僕である預言者を遣わし続けたこと、その神の忍耐深さと憐れみを表しています。しかしそれにもかからず、イスラエルとその指導者たちは悔い改めず、預言者たちは迫害し、侮辱してきたのです。

そして 20 章 13 節
「そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』」
この主人は最終的に自分の愛する息子を送るのです。これは神の愛する独り子イエス・キリストを表していることは明らかです（ルカ 3:22 参照）。この主人は何人も自分の僕が殴りつけられ、侮辱されたにもかかわらず、「この子ならたぶん敬ってくれるだろう」という期待を込めて自分の愛する息子を送り出したのです。そうして農夫たちに最後のチャンス（機会）を与えたのです。
しかし農夫たちはどうしたでしょうか。14 節には次のようにあります。
「農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』」
彼らは「これは跡取りだ、相続人だ」と言っています。つまり遣わされてきたのが主人の息子だと気づいているのです。しかしその息子を敬うことをせず、むしろ「殺してしまおう」と言います。なぜなら「そうすれば、相続財産は我々のものになる」と考えたからです。当時、相続人がいない土地は、小作人がその所有者になることがあったようです。農夫たちはぶどう園の主人が既に死んでしまったか、もう帰って来ないと高を括っていたのかもしれません。だから主人の息子である跡取りを殺してしまえばぶどう園がまるまる自分たちのものになる。そう考えたのでしょう。そして 15 節にあるように彼らは「息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった」のです。そして実際、イスラエルの指導者たちはイエスをエルサレムの門の外に追い出し、ゴルゴダの丘の上で十字架につけて殺してしまったのです。
ここで描かれているのはイスラエルの指導者たちが犯した罪です。しかしこれを私たちは他人事として聞き流してはならないのだと思います。ぶどう園の農夫たちはなぜ主人が遣わした僕たちを拒絶し、そして最後に遣わされた息子を殺してしまったのでしょうか。それは彼らの強欲によることです。彼らはぶどう園を主人から貸してもらっていたにも関わらず、その収穫を納めることを拒否し、すべて自分のものにしようとしたのです。そしてぶどう園をまるごと自分たちのものにしようと、その跡取りである息子を殺してしまいました。すべてを自分のものにしようとする強欲、傲慢の罪が、最終的には神の御子イエス・キリストを殺すことになったのです。私たちも神様から様々なものを委ねられています。自分の命、人生、お金や時間も実は神様から私たちに預けられているものです。その実りの一部は神様にお返しすべきなのです。しかし、それを拒否し、すべてを自分のものとし、自分の思うままに使おうとするならば結局はこの農夫たちと同じ罪を犯すことになってしまうのです。

その結果はどうなるのでしょうか。農夫たちの思惑通り、彼らはぶどう園の所有者となれるのでしょうか。そうではありません。イエス様は 15 節後半で「さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか」と問いつつ、16 節で次のようにおっしゃっています。
「戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」
悪い農夫たちは帰ってきた主人によって滅ぼされ、ぶどう園は他の人たちに与えられることになるのです。この「他の人たち」とは使徒たち、キリスト教の指導者たちのことを指していると思われます。神の民であるイスラエルは、ユダヤ教の指導者たちから取り上げられ、使徒たち（キリスト教の指導者）に任されることになったのです。

②イエスという石（20:16-19）

これを聞いた人々は「そんなことがあってはなりません（そんなことになりませんように）」とイエス様に言いました。イエス様は彼らを見つめて言われました。

「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。『家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。』」

ここで引用されているのは詩編 118 編 22 節の御言葉です。「家を建てる者」とは「ぶどう園の農夫」と同じようにイスラエルの指導者を表しています。彼らはイスラエルという家を建てる役割を与えられた人たちでした。その彼らが家を建てるにあたって「これはいらない」と言って捨てた石が、「隅の親石」すなわち家を建てるために最も重要な土台の石になった、ということです。そのような不思議なことが起こると預言されていたのです。この「石」はイエス・キリストのことを指しています。家を建てる者であるイスラエルの指導者たちはイエスを捨て、殺したわけですが、神はイエスを復活させ、新しく家を建てるための「隅の親石、土台の石」とされたのです。

さらに 20 章 18 節には次のようにあります。

「その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」

家を建てる者が捨て去った「石」は「隅の親石」となるだけではなく、それを捨てた者を裁き、打ち砕く「石」ともなる、ということです（イザヤ 8:14-15 参照）。

これを聞いた指導者たちの反応が 19 節に記されています。

「そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた」。

彼らはイエスが語られた神の裁きを恐れ、悔い改めるということはしませんでした。むしろそのように自分たちに当てつけて語ったイエスに手を下し、黙らせようとしたのです。しかし彼らはイエスを支持する民衆を恐れてそれを実行に移すことはできませんでした。彼らは神を恐れず、人間を恐れる指導者だったと言わなければなりません。

今日の御言葉において教えられていることは、神が遣わされた御子イエス・キリストを受け入れるか否かが決定的なことである、ということです。このイエスを拒絶し、捨て去るならば自らに裁きを招くことになります。神様はご自分の子であるイエス・キリストを敬い、神様に良き実をささげて生きていくことを望んでおられます。そしてこのイエスこそ、神が据えられた「隅の親石」、私たちの救いの堅固な土台です。このお方を信じ、依り頼むならば、私たちはもはや死や滅びを恐れる必要はありません。キリストという土台の石が堅固であるがゆえに、どのような洪水が襲ってこようともその上に建てれられた家は揺らぐことなく、安全なのです。私たちは、ぶどう園の農夫のような傲慢な罪に陥ることなく、このキリストを受け入れ、信じ、依り頼む教会、神の家として建て上げられていきたいと願います。